

は、電が生成される過程をこのように認識していたことが、『朱子語類』巻二所収の言説から知れる。その言説を展開する中で朱熹は、「蜥蜴は電を生成する」という現象の根拠に、『夷堅志』の記録を用いている。

『夷堅志』は、洪邁（一一三三—一二〇二）の撰による志怪小説集である。この『夷堅志』乙志卷十三に、「嵩山三異」と題した記録がある。その話中に、蜥蜴が電を生成している様子が描写されていて、それを朱熹は根拠のひとつとして用いているのである。

またこの朱熹の言説は、そもそもが程頤と張載との間で交わされた、蜥蜴と電との因果関係に関する問答に端を発している。

朱熹は、「蜥蜴は電を生成する」という現象を事実であろうと認識し、そのメカニズムを陰陽という概念を用いて、朱熹流の合理的思考で理解していた。

本発表では、先に挙げた『朱子語類』巻二に所収されている言説を中心に、朱熹の思考営為の一側面を考えてみる。またこの作業の一環として、他の宋代士大夫達による、蜥蜴が電を生成する現象に関する認識も確認する。

## 幸内純一の憂鬱

### アナキズム、アニメーション、戦争協力

文学部国文学科専任講師 足立 元

日本の国産アニメーションが作られて百年の今、その創始者の一

人、幸内純一（一八八六一—一九七〇）について振り返ってみたい。この人物がアナキストであったこと、アニメーション作家であったこと、そして後に権力側と戦争に加担したことは、単なる変節として済ますことのできない問題をはらんでいる。

幸内は、若き日に画家を諦めて、漫画家の道に進んだ。一九二二年にアナキストの大杉栄らが創刊した文芸誌『近代思想』に「同志」として関わり、その巻頭に鎖を引きちぎろうとする男の絵を寄せた。その絵は、大杉の詩作を触発した可能性がある。一九一七年にはアニメーション「なまくら刀」を発表した。それは、日本においてアニメーションとアナキズムの歴史が交差していたことを示す。しかし、戦時中には翼賛的な作品を進んで制作し、戦後は表舞台から消えた。

結局幸内の人生は挫折の連続だったのかもしれない。だが彼は、アニメーションの他にも、「鎖」をめぐる表現史の萌芽を撒いていた。後の画家たちによって変奏された「鎖」のかたちからは、個人を超えた反逆の精神史が浮かび上がる。

### 〈第Ⅱ会場〉

#### 漱石からの音を聴く

#### ——『三四郎』を中心に

文学研究科国文学専攻博士前期課程二年 バク・ヨソソ

漱石の作品において「心の自由」の解釈をする際に、音の分析を

介することによって新たな視点が得られることを示すのがこの発表目的である。後に『野分』、『ころも』も一緒に扱うのだが、今回は『三四郎』を中心として扱う。これらの作品中の「音」に着目し、テクストを通し、作中の人物の内面の揺れを考察する。三つの作品に見られる心の自由を「音」を通じて追求し、明治時代の文化の多様性を考える。特に『三四郎』のテーマの一つである、「心の自由」は漱石文学の重要な人心の現実描写でもある。三つの作品で通低する「音」は世界人の内面の道具として人間が受けついできた、東西思想に焦点をあてて考察したい。その時世に生きてきた平凡な人々の考え方や人物の迷いを「音」で追うと、新しい解釈が可能であろう。まず、『三四郎』の偉大なる心の流れが、彼を変化させていく人間力のヴィジョンであることから考える。

## 歌謡曲『青い山脈』論

——民主主義の再興と

映画主題歌としての隠蔽——

文学研究科国文学専攻博士前期課程二年 松井 秀之

『青い山脈』は石坂洋次郎の小説に始まり、映画、テレビドラマ、歌謡曲など、幅広いメディア領域にまたがる作品である。とりわけ歌謡曲『青い山脈』は、かつて国民的愛唱歌の代名詞として、「日本人の好む歌」の一位に選ばれる知名度と人気を獲得した。また、『青い山脈』は、昭和の各年代で合計五回の映画化を果たしている

が、その全てに歌謡曲『青い山脈』は主題歌として起用され続けている。しかしながら、これまでの『青い山脈』論における歌謡曲の存在は、あくまで基本情報の一材料として引用されるに留まり、軽視されてきたと言える。

本発表は、これまでの先行研究において「明るい」イメージ以上の精査がなされてこなかった歌謡曲の視点から、『青い山脈』論に一石を投じるものである。はじめに、歌詞の中でもその象徴として多く引用されてきた「雪割桜」を中心に、歌謡曲『青い山脈』の作品構造を明らかにする。次に、映画主題歌として劇中で流される際、第三聯の歌詞が省略されている点に注目し考察することで、『青い山脈』論の研究課題の一つに挙げられる、『青い山脈』が現代から姿を消した背景について論じたい。

## 開高健の「集団」観

——開高健『日本三文オペラ』の

同時代的意義——

文学研究科国文学専攻前期課程一年 丹治 可奈

開高健は先行研究で度々その捉えどころのなさが指摘され、現在においてもいまだ文学史的な位置づけが明確になされていない作家である。理由としては、小説以外にルポルタージュ、食や釣りに関するエッセイなど、多様なジャンルに取り組んでいること、初期から後期にかけて大きく作風が転換することなどが挙げられる。この